

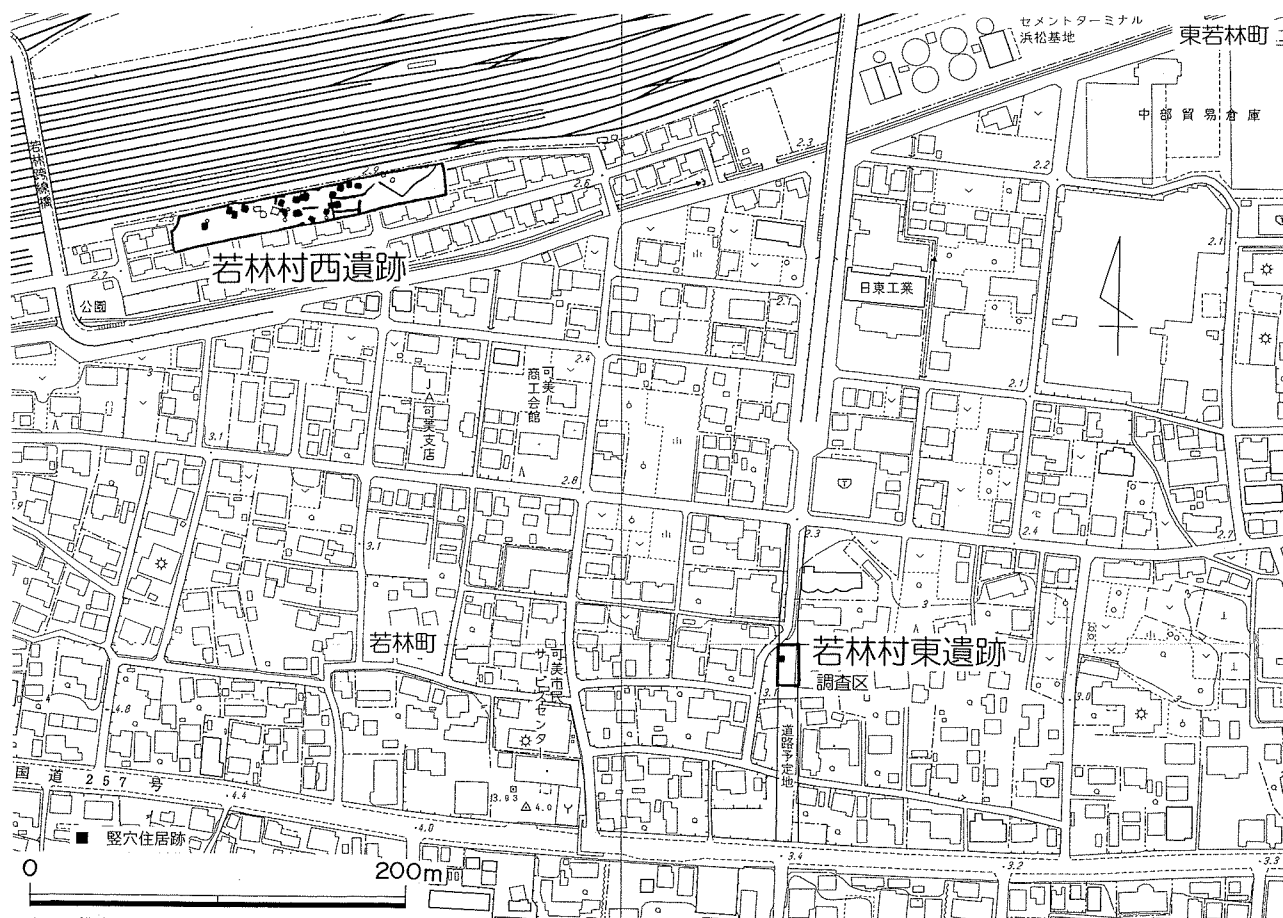
わかばやしむらひがし
若林村東遺跡

1998年3月

財団法人 浜松市文化協会

例 言

1. 本書は、浜松市若林町826番地の1他における若林村東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、市道若林101,67号線道路改良工事に係わる事前調査として実施した。
3. 発掘調査は、浜松市建設部道路建設課の委託を受け、財団法人浜松市文化協会が、浜松市教育委員会（浜松市博物館）の指導のもとに実施した。
4. 調査に係わる費用は、全額委託者が負担した。
5. 発掘調査に係わる期間と体制は、以下の通りである。
 - (1) 試掘調査 1996年6月25日
調査担当 川江秀孝・辰巳均・鈴木正行（浜松市博物館）
 - (2) 発掘調査 1997年10月1日～10月4日
調査担当 辰巳均・佐藤拓伸（浜松市博物館）
6. 本書の執筆は、川江秀孝、辰巳均の助言を得ながら佐藤拓伸が行った。なお、整理作業全般において前浜松市博物館長向坂鋼二氏、中近世の施釉陶器については愛知県陶磁資料館主任学芸員井上喜久男氏の懇篤なるご教示を得た。
7. 調査に係わる諸記録及び出土遺物は、浜松市博物館で保管している。



第1図 若林村東遺跡調査地区位置図



第1章 発掘調査の経過

調査の経緯

1993年6月16日、浜松市道路建設課より浜松市教育委員会に、若林101,67号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての相談があった。そこで、浜松市埋蔵文化財包蔵地台帳・分布図と照合したところ、当該工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地内であることが判明した。そのため、同年6月20日に現地確認調査を行った。

確認調査の結果、道路や建物によってすでに埋蔵文化財が破壊されている箇所が多く、大部分が発掘調査の必要なしと判断された。しかし、既存建築物の下やその周辺に埋蔵文化財が遺存している可能性が高い箇所が認められた。そこで、それらの部分については、工事着手時に立ち会い調査、あるいは工事予定地内への立ち入り可能になった時点での詳細分布調査を実施し、再度協議したいと回答した。

1996年6月25日、7カ所の試掘調査の結果、内1カ所で遺構・遺物が確認されたため、道路建設課と協議の結果、道路工事施工前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

第2章 発掘調査の成果

1. 遺構について

遺構検出面は、基盤層にあたる灰黄褐色砂質土層（第2図3層）である。南西部分が最も高く、全体として南側から北側に向かって傾斜している。基盤層と黒褐色砂質土層からなる表土（1層）との間に遺物包含層がある。この遺物包含層は暗褐色砂質土層（2層）で、奈良時代から近世までの遺物が含まれているが、さらに細かい層位の区別はできなかった。

遺構の覆土は、一部不明確なものはあるが、暗褐色砂質土と灰褐色砂質土とに分けられる。層位では判断しにくいのが、出土遺物より暗褐色砂質土は奈良・平安時代、灰褐色砂質土は室町時代以降の遺構と考えられる。灰褐色砂質土の中にはわずかな違いがあったが、それにより遺構を室町時代のものと江戸時代のものとに区別するまでには至らなかった。

発掘区の中で遺構が検出されたのは、B区とC区で、奈良・平安時代、室町時代、江戸時代の3時期が中心である。D区は、基盤層が高くなり、遺物包含層から奈良時代～江戸時代の土器や陶器の小片が出土したが、遺構は検出されなかった。各時代の遺構について次に述べるが、B・C区の検出遺構全体図を第2図に、遺構の大きさ・伴出した出土遺物などを第1表に示した。

(1) 奈良・平安時代の遺構

奈良・平安時代の遺構は発掘区全体に広がり、竪穴住居跡・溝状遺構・小穴が確認された。

① 竪穴住居跡 SB01（第3図）

B区西端に位置し、四辺がほぼ東西もしくは南北方向を向いている。西端が発掘区外で、東西の正確な長さは把握できないが、東西3.42m×南北2.88mの長方形をしている。覆土は暗褐色砂質土で、掘り込みは検出面より30cmほどである。北壁東よりに0.9m×1.4mほどの大きさの灰白色の粘土塊が存在する。竈の一部と推定されるが、火を受けた痕跡は認められなかった。この住居跡に関係すると

思われるSP40は、深さが床面より11cmほどと浅く、柱穴とは考えにくい。柱穴とともに周溝などの施設は検出されなかったが、周辺の若林村西遺跡でこれと同じ時期の同規模の竪穴住居跡が確認されていること、竈の可能性を否定できない灰白色粘土塊が存在することなどから、SB01は竪穴住居跡と考える。

この住居跡からの出土遺物として8世紀の土師器甕(10)、須恵器甕(11・12)ほか、須恵器や土師器の坏・甕の小片があり、これらより奈良時代の住居跡と考えられる。

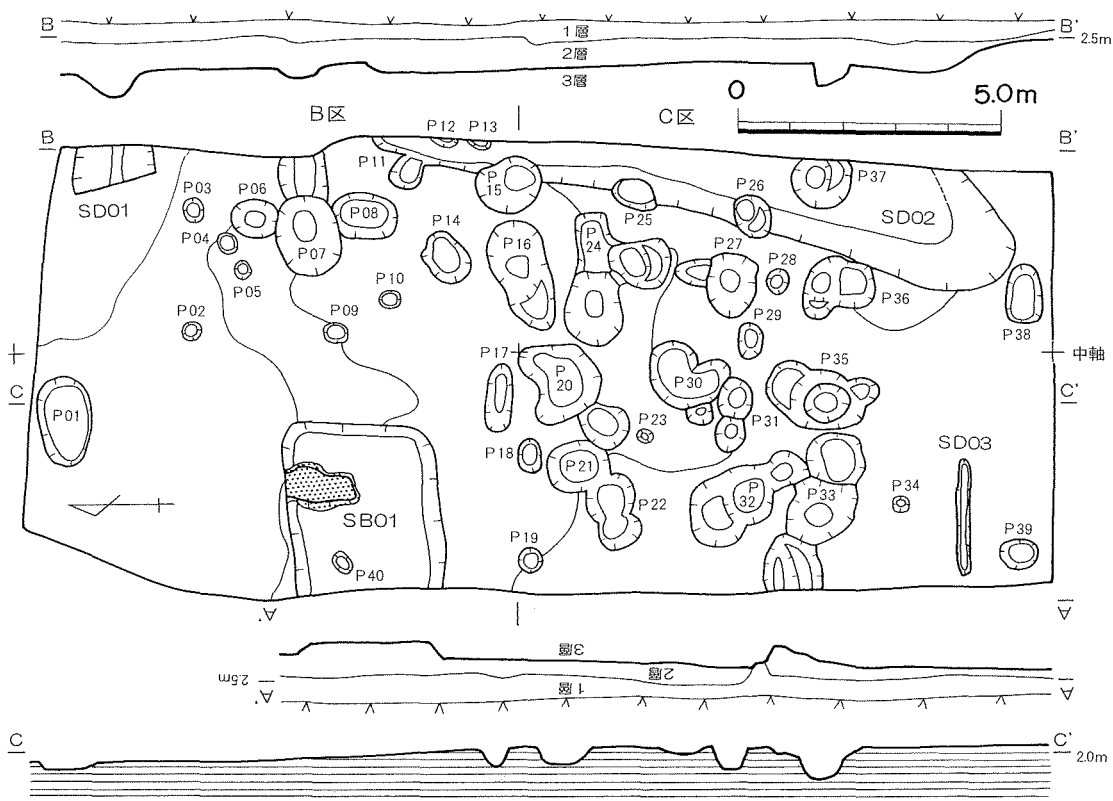
②溝状遺構 SD01・03

SD01は、B区北東端を東西に貫き、底面は東にむかうほど低くなっている。西側には攪乱があり、東側は発掘区外に延びていることから、規模や性格は把握できない。覆土は暗褐色砂質土で、7世紀末から8世紀後半と思われる土師器・須恵器の坏・甕片が出土している。

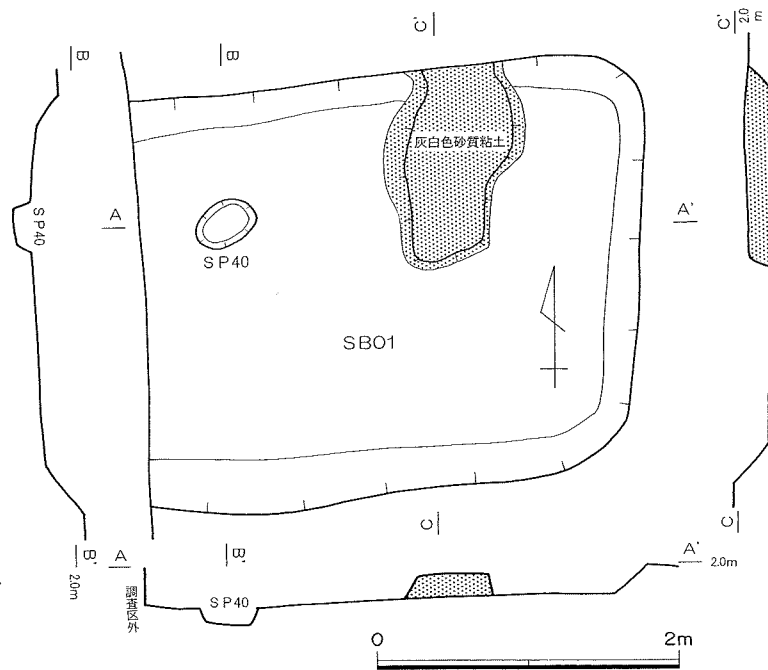
SD03は、C区南西寄りに位置し、東西に2.3m、幅は30cmにも満たない。深さも14cm足らずで、8世紀中～後半と思われる土師器・須恵器の坏・甕片が出土したが、その性格は不明である。

③小穴 SP01～05・09・13・22・28・29・34

SP01は長円形、SP22は瓢箪形であるが、他は直径30～50cmの円形の小穴である。覆土は一部を除きいずれも暗褐色砂質土である。遺物は、SP13から甑の把手(13)、SP22から須恵器壺(14)、須恵器坏蓋(15)が出土しているほか、7世紀末～8世紀の土師器や須恵器の坏・甕の小片が出土している。



第2図 B・C区検出遺構全体図・断面図・土層断面図



第3図 竪穴住居跡実測図 (SB01)

(2)室町時代の遺構

室町時代に該当する遺構には、溝状遺構と小穴があり、小穴には溝状につながったものがある。

①溝状遺構 SD02

B・C区東端にあり、底面は南南西から北北東にわずかながら傾斜している。発掘区外に延びているため、その正確な規模や形状は判断できないが、室町時代の住居に関連した壕か排水路ではなかったかと推定される。覆土は灰褐色砂質土で、16世紀末の美濃産志野皿(36)や15～16世紀の土師器やかかわらけの小片のほか、7世紀後半と8世紀～9世紀初頭の須恵器坏身(17・24)や土師器甕(25)など、奈良・平安時代の土師器・須恵器の坏・甕も出土した。

②小穴 SP06・08・14・17・20・21・23・24・26・27・30・32・37

B区南からC区北に集中して13ほど確認され、円形か長円形、もしくはそれらが2、3重なった形状をしている。覆土は灰褐色砂質土で、掘り方は20～35cmと50～70cmに大別されるが、その性格は不明である。遺物は、鉄釉小皿(35)をはじめ16世紀後半～末の美濃、細江町初山産の施釉陶器、羽釜(32)やかかわらけ(29)とそれら小片が出土している。また、須恵器坏身(9・22)・盤(18・20)・坏蓋(16)や土師器甕(19・23)など、8世紀～9世紀前半の須恵器・土師器や、9世紀前半～中頃の黒笹14号窯式の鉄釉碗(21)も出土している。

(3)江戸時代の遺構

①小穴 SP07・15・16・18・33・35・36・39

溝状につながる多くの小穴は、室町時代のものと重なるように、B区南からC区北に位置している。配置から柱穴とも考えられるが、掘り方は60～70cmほどで、この時代の住居跡には大きすぎる。その遺構の性格は不明と言わざるを得ない。出土遺物は、鉄釉碗・皿(38・40・42)や天目茶碗(37・41)など、17世紀中頃～19世紀初頭の瀬戸産陶器のほか、16世紀代の施釉陶器や土師器の小片、12世紀の湖西産山茶碗、奈良時代の土師器・須恵器などがある。また、仏餉器(49)や鉄釉小坏(47)、鉄釉香炉(48)などが含まれていることから墓地に関連した遺構である可能性もある。

2. 遺物について

若林村東遺跡の遺物は、奈良時代から江戸時代のものまで幅広く出土したが、ほとんどが小片であった。遺物包含層を含め、ほとんどの遺構から奈良時代の土師器甕や坏類が出土している。ここでは、出土遺物について、図化したものを中心に時代を追って述べる。

(1) 奈良・平安時代の出土遺物 (第4図)

奈良時代の遺物は、遺物包含層を含め、ほぼ発掘区全域から出土している。土師器の甕や坏の小片が多く、赤色顔料が塗布されているものもある。須恵器も盤や坏身・蓋など小片がたくさん出土している。平安時代の遺物は、9世紀代の猿投窯産須恵器甕や灰釉陶器の小片がわずかだが出土している。また、12世紀中～末の湖西窯産山茶碗の小片も数片出土した。

① 須恵器坏 (第4図1・3・6・7・9・15・16・17・22・24)

1・3・9・17・24は坏身、7・22は高台付坏身、6・15・16は坏蓋である。1は底部に糸切り痕があり、8世紀後半から9世紀初頭のものと思われる。24もこれとほぼ同時期で、底部が糸切り後へう整形されている。3と17は7世紀後半、9は8世紀後半の所産と推定される。

7・22はともに断面台形の高台が縁近くに付き、底部は中央が下がり、へう整形されている。8世紀前半のものと思われる。

6は器高がやや低く扁平な形をしており、表面にへうケズリの痕を残している。口縁端部は直角に折れ曲がり持ち上がっている。8世紀後半から9世紀のものと思われる。15・16は8世紀前半の所産で、15の内側には灰白色の自然釉が付着している。

② 須恵器盤 (第4図8・18・20)

8は高台付盤で、底部は糸切り後へう整形されている。上面は、顕著な摩耗が認められる。8世紀後半から9世紀のものと思われる。18・20は盤の口縁部で、8世紀後半の所産である。20は外面に自然釉の吹き出しがある。

③ 須恵器壺・甕 (第4図11・12・14・26)

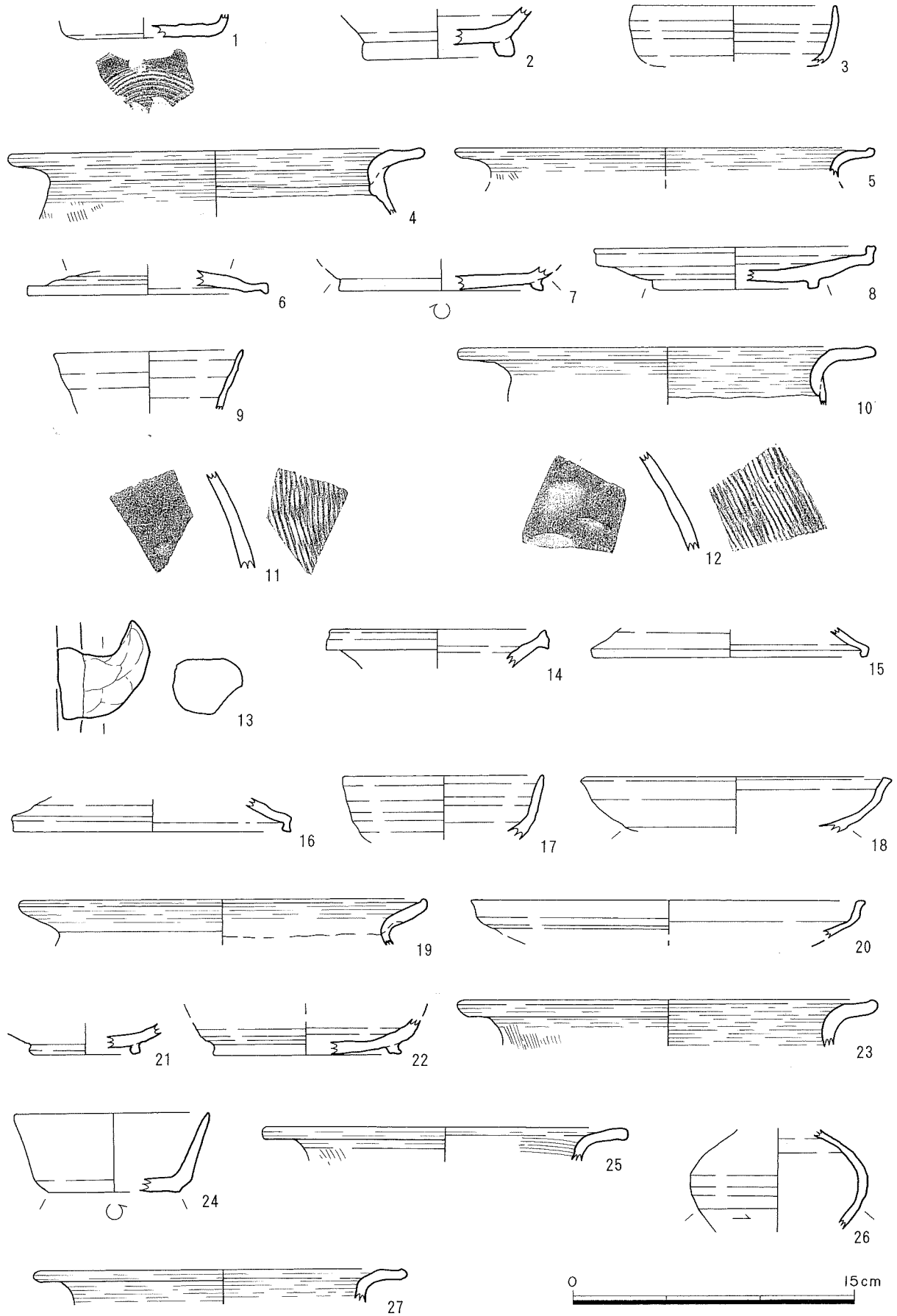
11・12は甕の体部片で、外側に平行タタキ目がある。内側は11にケズリの痕が見られ、12には青海波文タタキ目の後すり消しとケズリの痕が残っている。ともに8世紀のものと思われる。14は7世紀代の甕の口縁部で、内側に黄緑色の自然釉が見られる。26は長頸壺と思われる体部片で、張った肩部には緑色自然釉が吹き出している。7世紀後半から8世紀代のものとする。

④ 土師器甕・甑 (第4図4・5・10・13・19・23・25・27)

4・5・10・23・25・27は、いずれも8世紀後半と思われる土師器甕の口縁部である。口唇部が水平になるまで外反させており、その時期の特徴が現れている。口縁部は内外面ヨコナデ、頸部以下外面はハケ、口唇部は丸く仕上げられている。19の口縁部はゆるやかな「くの字」形をしている。内外面ともヨコナデ調整がされており、8世紀前半のものと思われる。13は土師器の甑の把手である。角張った形状をしていて、7世紀後半から8世紀のものとする。

⑤ 灰釉碗・長頸瓶 (第4図2・21)

2は長頸瓶の底部片で、断面台形の高台が貼り付けられている。外面はへう整形され、黄緑色灰釉が施されている。21は灰釉碗の底部片で、内面に緑色釉、外面に灰白色釉がかけられている。底部には四角形の高台が貼り付けられている。いずれも黒笹14号窯式の灰釉陶器で、9世紀前半から中頃のものと思われる。また、小片のため図化してはいないが、9世紀後半の黒笹90号窯式と思われる灰釉碗の口縁部も出土している。



第4図 奈良・平安時代の出土遺物実測図

(2)室町時代の出土遺物 (第5図)

室町時代の遺物には、土師系の内耳鍋や羽釜、かわらけと瀬戸・美濃・細江町初山窯の碗皿類の中世陶器がある。

①内耳鍋・羽釜・かわらけ (第5図28・29・30・32・33・51)

16世紀代と思われる内耳鍋は、いずれも小片で特に図化したものはない。32・33は羽釜の口縁部片で、口端部は内側に折れ、外側に鏝状の突帯を巡らしている。器厚はとても薄く、内面に指頭圧痕とヨコナデ、外面にはヨコナデと煤の付着が見られる。いずれも15世紀前半のものとする。

28～30はいずれもロクロ成形されたかわらけで、色調は明るさに違いはあるが乳白色をしている。

28と29は内外面ともヨコナデされ、体部中央付近で器壁が薄くなっている。29は底部から体部中ほどまで厚く作られていて、底部にゆがみが見られる。内面と口縁部分に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと判断される。いずれの底部にも糸切り痕が残る。51は手捏ねのかわらけである。他にも出土しているが、小片のため図化してはいない。

②中世陶器 (第5図34・35・36)

34は瀬戸産の灰釉平碗の口縁部で、緑色釉が施されている。腰部はヘラケズリされ、無釉である。15世紀末の大窯Ⅰ期のものと思われる。室町時代の瀬戸産の中世陶器はこれのみの出土であった。

35は16世紀後半に細江町初山窯で焼かれたと思われる鉄釉小皿である。口径が10.4cmで全面に鉄釉が施され、口縁部にはさらに黄褐色釉が塗られている。内面に焼成の時に使用された窯道具の輪トチンの痕が残っている。また、底面には「丸に十」と思われる墨書がある。この時期の初山窯と思われるものは、他に天目茶碗、搦鉢などがあるが、いずれも小片のため図化してはいない。

36は美濃窯で焼かれた志野皿の底部である。底部径7.2cmで、内面に重ね焼きの痕跡を小さくするために用いられた円錐ピン痕がある。全体に白色長石釉がかけられ、16世紀末のものと思われる。小片のため図化していないが、同時期の志野皿の口縁部片、16世紀前半の美濃窯産の搦鉢、天目茶碗も出土している。

(3)江戸時代の出土遺物 (第5図)

江戸時代の遺物は、かわらけと近世陶磁器がある。近世磁陶器はほとんどが瀬戸窯のもので、碗・皿類や片口、染付陶器などがあり、仏餉器や香炉など供物に関連したものも含まれている。また、寛永通宝やキセル吸口と思われる金属製品も出土している。

①かわらけ (第5図31)

31は17世紀後半のものと思われるかわらけである。ロクロ成形され、器壁は薄く、色調は赤っぽい肌色である。底部には糸切り痕が残る。内外面はヨコナデされ、丁寧に仕上げられている。小片のため図化していないが、同時期と思われる手捏ねのかわらけも出土している。色調は灰白色で、指頭痕を残し薄く作られている。

②近世陶磁器 (第5図37～50)

37～39は登窯Ⅱ期にあたる17世紀前半～中頃に瀬戸で焼かれたものである。図化していない茶入や段付白天目茶碗などの小片も含め、当遺跡ではこの時期の近世陶磁器が最も多く出土した。37は天目茶碗の底部片で、底部径は4.8cm、ロクロ回転による削り出し高台がある。高台はナデ仕上げが施され、面や角がなめらかで、無釉である。内面には鉄釉が施されている。38は鉄釉碗の口縁部で、口端部が外反している。39は灰釉皿の底部片で、内面に灰釉がかけられ、円錐ピンのピン痕が残っている。高台がついた底部は無釉で、煤が付着していることから灯明皿として使用されていた可能性がある。

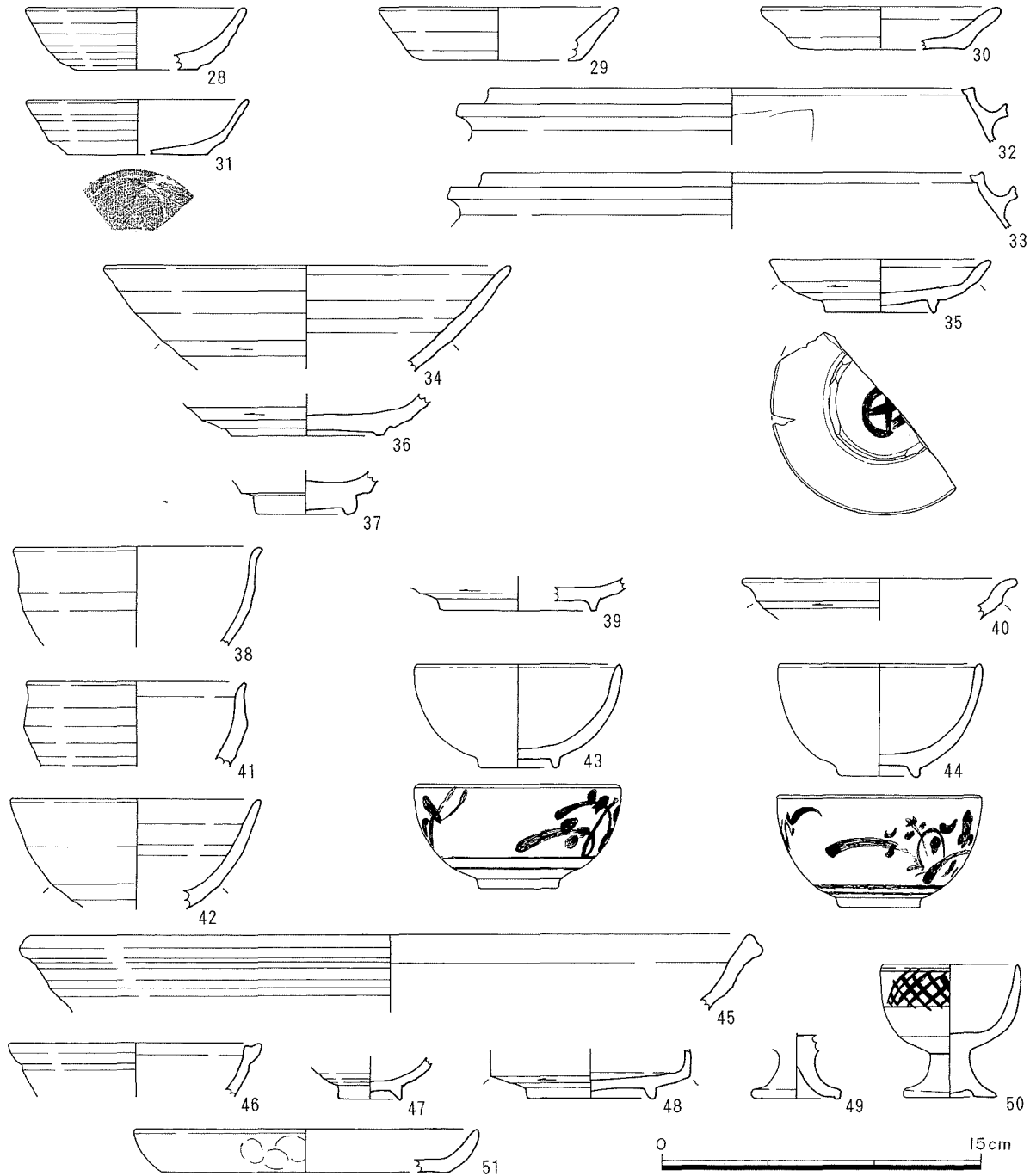
40は口端部が外反した鉄釉皿の口縁部で、内外面鉄釉が施されているが、底部は無釉である。41は天目茶碗で、胴部での屈折が直線的で径が口径よりも大きい。内外面とも鉄釉がかけられている。いずれも瀬戸産で、17世紀後半の登窯Ⅲ期のものと考えられる。

42は登窯Ⅳ期にあたる17世紀末から18世紀初頭に瀬戸で焼かれたと思われる鉄釉丸碗の口縁部片である。内外面とも鉄釉が施されているが、底部は無釉であったと思われる。小片のため図化していないが、鬢付け油を入れておく鬢盥が同時期のものとして出土している。

43・44は、18世紀末（登窯Ⅶ期）に瀬戸で焼かれた陶胎の染め付けで、染付陶器と呼ばれているものである。外面に呉須絵と呼ばれる絵柄が、青緑色の濃淡で描かれている。43は梅、44は草木を描いたものと思われる。表面には白黄色の釉がかけられている。45は播鉢の口縁部片で、内外面鉄釉が施され、口端部は厚く外側へ突出している。瀬戸産の同時期のものと思われる。

遺構名	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	出土遺物 (内)は実測図の番号	時期 (推定)
S B 01	B	3.42	2.88	30.0	土師器甕(10) 須恵器甕(11・12)	奈良
S D 01	B	0.94	1.56	52.0	土師器・須恵器坏甕類	奈良
S D 02	B・C	12.20	2.36	36.0	須恵器坏身(17・24) 土師器甕(25) かわらけ(51) 志野皿(36)	室町
S D 03	C	2.30	0.28	13.5	土師器・須恵器坏甕類	奈良
S P 01	B	1.80	1.02	16.5	土師器・須恵器坏甕類	奈良
S P 02	B	0.38	0.36	10.0	土師器坏甕類	奈良
S P 03	B	0.48	0.40	17.5	土師器・須恵器坏甕類	奈良
S P 04	B	0.44	0.36	16.5	土師器・須恵器坏甕類	奈良
S P 05	B	0.36	0.32	13.0	須恵器坏	奈良
S P 06	B	0.90	0.80	31.5	須恵器坏身(9) 土師器坏甕類	室町
S P 07	B	2.36	1.18	62.5	土師器・須恵器坏甕類 志野皿 染付陶器(43) 灰釉片口(46) 灰釉小坏(47) 灰釉香炉(48) 鉄刀	江戸
S P 08	B	1.22	0.92	24.0	土師器・須恵器坏甕類 土鍋	室町
S P 09	B	0.44	0.42	25.0	土師器・須恵器坏甕類	奈良
S P 10	B	0.36	0.32	17.5	出土遺物なし	不明
S P 11	B	0.72	0.56	19.0	出土遺物なし	不明
S P 12	B	0.54	0.20	12.5	出土遺物なし	不明
S P 13	B	0.46	0.22	13.5	土師器・須恵器坏甕類 甌把手(13)	奈良
S P 14	B	1.10	0.80	24.0	土師器・須恵器坏甕類	室町
S P 15	B・C	1.30	1.10	71.0	土師器・須恵器坏甕類 山茶碗 かわらけ(28) 茶入 鉄釉皿(40)	江戸
S P 16	B・C	2.32	1.16	68.0	土師器・須恵器坏甕類 播鉢 鉄釉小皿 段付白天目	江戸
S P 17	B	1.36	0.52	36.5	土師器・須恵器坏甕類	室町
S P 18	C	0.66	0.44	25.0	土師器坏甕類 キセル吸口	江戸
S P 19	C	0.48	0.46	22.0	出土遺物なし	不明
S P 20	C	1.72	1.50	35.0	須恵器坏蓋(16) 須恵器坏身(18) 土師器・須恵器坏甕類 羽釜(32) 土錘	室町
S P 21	C	2.02	1.16	22.5	土師器・須恵器坏甕類	室町
S P 22	C	1.42	0.96	28.5	須恵器壺(14) 須恵器坏蓋(15) 土師器坏甕類	奈良
S P 23	C	0.28	0.26	21.0	土鍋	室町
S P 24	C	2.66	1.98	56.5	土師器・須恵器坏甕類 灰釉碗	室町
S P 25	C	0.86	0.56	9.5	出土遺物なし	不明
S P 26	C	0.92	0.76	74.0	土師器甕(23) 土師器坏甕類 天目茶碗 志野皿	室町
S P 27	C	1.54	1.26	72.0	土師器・須恵器坏甕類 内耳鍋	室町
S P 28	C	0.48	0.42	27.0	土師器坏甕類	奈良
S P 29	C	0.74	0.48	41.0	土師器・須恵器坏甕類	奈良
S P 30	C	1.48	1.20	36.5	土師器・須恵器坏甕類 かわらけ(29)	室町
S P 31	C	1.46	0.62	43.5	出土遺物なし	不明
S P 32	C	2.48	1.32	59.5	土師器甕(19) 須恵器坏身(20・22) 灰釉碗(21) 鉄釉小皿(35) 土錘	室町
S P 33	C	3.28	1.16	60.0	須恵器壺(26) 土師器・須恵器坏甕類 かわらけ(30) 鉄釉丸碗 天目茶碗(37) キセル吸口	江戸
S P 34	C	0.32	0.30	33.0	土師器甕	奈良
S P 35	C	1.92	1.22	69.0	土師器・須恵器坏甕類 鉄釉碗(38・42) 天目茶碗(41)	江戸
S P 36	C	1.34	1.30	74.0	土師器甕(27) 土師器・須恵器坏甕類 土鍋 志野皿 かわらけ	江戸
S P 37	C	1.16	0.98	45.5	土師器坏甕類 土鍋	室町
S P 38	C	1.18	0.66	13.0	出土遺物なし	不明
S P 39	C	0.94	0.62	9.5	土師器坏甕類 鬢盥 仏餉器(49)	江戸
S P 40	C	0.44	0.30	11.0	出土遺物なし	不明

第1表 検出遺構一覧表



遺物No.	器種	産地	年代	編年期	遺構名	備考
34	灰釉平碗	瀬戸	15世紀末	大窯Ⅰ	包含層	推定口径19.2cm、緑色釉、腰部ヘラケズリ・無釉
35	鉄釉小皿	初山	16世紀後半	大窯Ⅲ	S P 32	口径10.4cm、底面墨書、鉄釉、口縁部黄褐色、輪トチン痕
36	志野皿	美濃	16世紀末	大窯Ⅴ	S D 02	底径7.2cm、白色長石釉、底面内雜ピン痕
37	天目茶碗	瀬戸	17世紀中葉	登窯Ⅱ	S P 33	底径4.8cm、底部ロクロ回転削出高台・無釉、内面鉄釉
38	鉄釉碗	瀬戸	17世紀中葉	登窯Ⅱ	S P 35	口縁部片、推定口径11.8cm、鉄釉
39	灰釉皿	瀬戸	17世紀中葉	登窯Ⅱ	包含層	推定底径7.4cm、内面灰釉・円錐ピン痕、外面無釉・煤
40	鉄釉皿	瀬戸	17世紀後半	登窯Ⅲ	S P 15	口縁部片、推定口径13.0cm、鉄釉、底部無釉
41	天目茶碗	瀬戸	17世紀後半	登窯Ⅲ	S P 35	口縁部片、推定口径10.4cm、鉄釉、口縁端部外反
42	鉄釉碗	瀬戸	17世紀末	登窯Ⅳ	S P 35	口縁部片、推定口径11.8cm、鉄釉、底部無釉
43	染付陶器	瀬戸	18世紀末	登窯Ⅶ	S P 07	口径9.8cm、器高4.9cm、白黄色釉、外面梅絵柄
44	染付陶器	瀬戸	18世紀末	登窯Ⅶ	包含層	口径9.6cm、器高5.3cm、白黄色釉、外面草木絵柄
45	挿鉢	瀬戸	18世紀末	登窯Ⅷ	包含層	口縁部片、推定口径35.2cm、鉄釉
46	灰釉片口	瀬戸	19世紀初頭	登窯Ⅷ	S P 07	口縁部片、推定口径12.0cm、灰釉
47	灰釉小环	瀬戸	19世紀初頭	登窯Ⅷ	S P 07	底径3.0cm、灰釉、底部無釉・高台断面三角形
48	灰釉香炉	瀬戸	19世紀初頭	登窯Ⅷ	S P 07	底径6.0cm、灰釉、内面・底部無釉、輪高台
49	仏師器	瀬戸	19世紀初頭	登窯Ⅷ	S P 39	脚部片、底径4.2cm、一部灰釉
50	染付磁器	不明	19世紀中葉	登窯Ⅹ	包含層	推定口径6.6cm、底径4.4cm、器高6.3cm、外面格子図柄

第5図 室町～江戸時代の出土遺物実測図（下段は施釉陶器・陶磁器一覧表）

46～49は19世紀初頭登窯Ⅶ期に瀬戸で焼かれたものである。46は灰釉片口鉢の口縁部片で、口端部は帯状に外側へ厚くなっている。47は灰釉小坏の底部で、断面三角形の高台が付いている。高台部分は無釉である。48は灰釉香炉で、底部と内面は無釉である。体部は筒状で薄く、腰部から垂直に立ち上がっている。底部には輪高台が付いており、線香立てとして利用されたと思われる。49は仏餉器の脚部で、外面に灰釉がかかっている。

50は染付磁器の仏餉器で、内外面に白色の釉がかけられ、外面には鮮やかな藍色で格子調の図柄が描かれている。産地の特定はできないが、19世紀中頃の幕末期に作られたものと思われる。

③金属製品

金属製品は図化しなかったが、寛永通宝、キセル吸口、鉄刀が出土している。包含層から出土した寛永通宝は、直径2.2cm、重さ2.1gである。キセル吸口はSP18、SP33から出土し、いずれも真鍮板1枚を折り曲げて作っている。伴出遺物から年代を特定することは不可能だが、17世紀後半以降のものと思われる。鉄刀は刃の長さが現存で16.7cm、最大幅2.6cmで、先へ行くほど細くなっている。SP07からの出土で、この遺構には奈良時代から19世紀初頭までの遺物が混在しているが、江戸時代の菜切り包丁ではないかと考える。

(4)時期不明の出土遺物

時期の特定できなかった遺物として土錘がある。灰色をした硬質の土錘は、長さ3.2cm、直径0.9cm、重さ2.2gで、長軸方向に0.35cmの円孔が貫通している。他に赤褐色の土錘で、長さが2.3cm、直径0.6cm、重さ0.7gのもの、長さ2.2cm、直径0.55cm、重さ0.6gのもの、長さ1.9cm、直径0.45cm、重さ0.4gの3つがある。いずれも0.2cmの円孔があいている。

第3章 まとめ

若林村東遺跡は、遠州灘の海面変化にともない形成された第3砂堤列上に営まれた遺跡である。遺跡の範囲は、調査が行き届いていないためはっきりしないが、試掘や地形から見て今回の発掘区は遺跡の南端部に当たる可能性が高い。海岸平野が形成され、その砂堤列上で人々が生活を始めたのは、縄文時代後期と考えられている。本遺跡では、遺物や遺構の検出状況により7世紀末から人々の営みが始められ、8世紀前半から9世紀初頭にかけて本格的に集落が栄えたと推定される。この時期の出土遺物は最も多く、包含層を含め、ほとんどの遺構から発掘区全域にわたり出土している。この時期の遺構として、北側に竈と思われる灰白色粘土塊を伴う竪穴住居が検出された。基盤が崩れやすい砂質土層であるため細部まで遺構の形状を明らかにすることはできなかった。その他の遺構についても、その正確な形、規模、性格を明確にすることは不可能であった。

9世紀を過ぎると、9世紀代の猿投窯産須恵器や灰釉陶器、12世紀後半の湖西窯産山茶碗などがわずかながら出土したに過ぎなかった。これまで官衙や寺院などの遺跡に出土が限られると考えられてきた黒笹14号窯式の灰釉陶器片が2片出土している。本遺跡の北北東600mあまりのところにある伊場・城山遺跡では、律令制時代の郡衙関係施設と指摘されている遺構やそれに伴う遺物が検出されている。また、最近の考古学的調査では、東海から関東にかけて広い地域に大量出土する灰釉陶器は、その流通が貢納的性格によるものではなく、商業的性格を持っていることを指摘しつつある。本遺跡の集落を、伊場・城山遺跡の郡衙関係施設に関係した集落と考えるか、物資の流通路としての東海道に関連

した集落と考えるか、今回の発掘調査だけでは判断できない。

それ以降、本遺跡で生活の痕跡が確認されるのは、15世紀前半からで、出土遺物の検出状況から集落が大きくなるのは16世紀前半と考えられる。この時期から江戸時代までの出土遺物の中心は、施釉陶器である。その編年と生産地を見ると、15世紀末には瀬戸産のもの、16世紀代は美濃産のものと細江町初山窯産のもの、17世紀前半以降は瀬戸産のものであることがわかる。このことは、16世紀後半から瀬戸で「瀬戸山離散」という衰退現象が起こり、生産の拠点が美濃に移ったこと、瀬戸窯の陶器生産の復興が17世紀前半であったことと一致する。この中・近世陶器の出土状況は、近在の細江町初山窯産のものが混在していることを含め、室町・江戸期の本遺跡や周辺集落の陶器流通における一般的な状況を示しているものと思われる。

また、この時期と思われる遺構は、先にも述べたが、基盤が砂質土層で崩れやすいこと、時期の違う遺構がいくつか重なり合っていることなどから、その性格は不明である。江戸時代の遺構についても、施釉陶器や染付陶器などの出土遺物より、東海道沿いの集落の北のはずれか、あるいは仏餉器や線香立て、貨幣、キセル吸口などから集落のはずれの墓地に類したところではないかと推定することとどまる。なお、北西300mに位置する若林村西遺跡とは、出土遺物がかなり類似していることから、関係が深い村であったと考えられる。

以上、今回の発掘調査について、時代をおって簡単に私見を述べてみた。遺構の性格とそれに伴う集落の実態を把握するまでには至らなかったもので、今後のこの地域の調査と文献との照合などにより解明されていくことを期待する。最後に、今回の発掘調査に御協力いただいた方々に深く感謝して、この報告を終えることとする。

《 参 考 文 献 》

- 1 工業技術院地質調査所 1972 『浜松市地質図』
- 2 静岡県 1994 『静岡県史 通史編Ⅰ 原始・古代』
- 3 (財)浜松市文化協会 1993 『城山遺跡Ⅴ』
- 4 (財)浜松市文化協会 1997 『城山遺跡Ⅵ』
- 5 (財)浜松市文化協会 1996 『若林村西遺跡』
- 6 (財)浜松市文化協会 1997 『九反田遺跡』
- 7 可美村教育委員会 1981 『城山遺跡調査報告』(現浜松市)
- 8 可美村教育委員会 1985 『可美村誌』
- 9 愛知県陶磁資料館 1997 『遺跡にみる戦国・桃山の茶道具』
- 10 井上喜久男 1990 「尾張陶磁(1)～近世初期の瀬戸物生産～」
『愛知県陶磁資料館研究紀要9』愛知県陶磁資料館
- 11 井上喜久男 1991 「尾張陶磁(2)～近世の瀬戸物生産～」
『愛知県陶磁資料館研究紀要10』愛知県陶磁資料館
- 12 浅田員由 1995 「猿投窯製品の流通について」『愛知県陶磁資料館研究紀要14』
愛知県陶磁資料館
- 13 足立順司 1991 「かわらけと内耳鍋について」『原川遺跡Ⅳ』
静岡県埋蔵文化財調査研究所

報告書抄録

書名(ふりがな)		若林村東遺跡(わかばやしむらひがしいせき)						
編著者名		佐藤拓伸						
編集機関		浜松市博物館 〒432-8018 浜松市蜷塚四丁目22-1 053(456)2208						
発行機関		(財)浜松市文化協会 〒430-9016 浜松市早馬町2-1 053(453)5234						
発行年月日		1998年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わかばやしむらひがしいせき 若林村東遺跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 わかばやしちょう 若林町826-1外	22202	22-14	34度 41分 9秒	137度 42分 34秒	1997年 10月1日 ～ 1997年 10月4日	約300m ²	市道改良 工事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
若林村東遺跡	集落	奈良時代 平安時代 室町時代 江戸時代	竪穴住居跡 1基 溝状遺構、小穴 なし 溝状遺構、小穴 小穴		須恵器・土師器 須恵器・土師器・灰釉陶器 内耳鍋・羽釜・かわらけ 中世陶器 近世陶磁器・かわらけ・寛 永通宝・キセル吸口・鉄刀		古代伊場遺跡群の周辺 集落 近世東海沿いの集落	

わかばやしむらひがし
若林村東遺跡

1998年3月25日

編集 浜松市博物館 〒432-8018
静岡県浜松市蜷塚4丁目22-1
TEL 053-456-2208
発行 財団法人 浜松市文化協会